

天地

ネットワークテーブル 533号

天地シニアネットワーク 2022. 7. 18

TENTI TODAY			1
会員の広場			2
読 書	エマニュエル・トッドの「第三次世界大戦はもう始まっている」を読んで	臺 一郎	2
歴史考察	徳川家康の外交顧問になったウィリアム・アダムス(三浦按針) なぜ、アダムスは家康に評価されたのか (3)	佐川 雄一	4
歴史考察	台湾の歴史を学ぶ(4)	田口 秀美	8
回 顧	国立慕情(15)「バスケットボール旧三商大定期戦」	津田 孚人	10
事務局			14

TENTI TODAY

安倍元首相の死、現在の日本にとっては大変残念なことです。国内では評価が分かれますが、国際的には各国首脳をよく知る安倍元首相への期待が大きく、その結果日本への関心も強かったはずです。次なる国際的に通用する政治家の早期出現を期待したいものです。

安倍元首相を射殺した犯人の動機が明らかになって来ました。個人的な不満が高じて相手に対して暴力に走る、これは今までもありました。今回のように直接の相手から、対象を周辺に切り替える安易さは恐ろしいことです。格差社会が進み、世の中から疎外される人が増えると、異常な事件が増えます。日本社会の在り方を、国民全体で考え直す時機です。

神戸でバスケットの旧三商大定期戦があり、6月21日から24日まで夫婦で関西へ行きました。帰京して3日後、家内がノドが少し痛いといい、2日してもよくなりないので発熱外来のある病院に連れて行きました。高齢者ですから一緒にPCR検査をしたところ、二人ともコロナ陽性と判定ができました。10日間自宅で行動制限をしましたが、小生は、38℃手前の熱が2日、家内は喉の痛みが数日だけ、共に症状は軽く制限が解けました。共にワクチン接種を3回受け、日ごろから健康に留意して食事をしっか

り取っていたので、軽症で済んだようです。

会 員 の 広 場

エマニュエル・トッドの「第三次世界大戦はもう始まっている」を読んで

臺 一 郎 74歳

ロシアによるウクライナへの侵攻が始まってから既に4ヶ月が経ちました。当初予想した以上に戦争が長引き、戦況が膠着状態となる中で、欧州やその他の世界への影響も明らかに変わってきたように思います。特にエネルギー供給や食料供給の面では、供給量の不足や不安定化、価格高騰などのネガティブな影響が世界中に広がっているようです。世界の一般人にとっては全く“いい迷惑”です。

ロシアのプーチン大統領にとっても、ウクライナのゼレンスキー大統領にとっても、そして米国のバイデン大統領にとっても、事態は予め思い描いていたものとはかなり異なった展開になっているのではないのでしょうか。また、フランス、ドイツなどの西ヨーロッパ各国では、ウクライナ疲れのようなものが始まっているとも言われています。

私のような一般人には、まだこの戦争の本質や世界的な影響、或いは今後の展開等について、冷静で客観的で合理的な分析、評価、予測等はなかなかできません。ともかく一方的にそして多分に感情的に、「ロシアが悪い」、「プーチンがひどい」という思いが強まり、「ロシア負けろ」、「ウクライナ負けろ」という判官贔屓的な心情への傾倒が進んでいます。

そこでヨーロッパの知性とか世界の知性とか言われる、フランスの歴史学者で文化人類学者であるエマニュエル・トッドの最新の著書「第三次世界大戦はもう始まっている」を読んでみたわけです。凡人が何年もかかって漸く「そういうことだったのか」と気づくようなことを、知の巨人と言われるような英才や天才はしばしばいち早く気づき、或いは見抜くからです。この本もそんな内容だろうとの想定や想いで読んでみました。

結果は期待に違わずで、僕は引き込まれるように一気に読んでしまいました。但し、トッドの分析や予測や指摘に対して、僕は全面的に納得し、賛成し、支持したわけではないのです。けれども、例えば最近の米国の政府や大統領には、自国の(歪んだ)国益偏重的な姿勢や独善的な言動が目につき、疑問や批判を感じることもしばしばだったので、トッドの指摘には納得し共感することが少なからずありました。

彼が強く言いたいことの一つは「この理不尽な戦争に関して非難されるべきは、2月

24 日にウクライナに軍事侵攻したロシアもさることながら、米国や英国も同じくらいに非難されるべきではないか」ということかと思えます。すなわち、実はこの戦争の陰の主役で、戦争のシナリオを書き、プーチンをウクライナ侵攻へと巧みに誘導し、自国の兵は一切参戦させず、もっぱら金と武器と情報の提供のみを行いながら、停戦もさせずダラダラと戦争を引き延ばすことによってロシアの弱体化を目論んでいるのは米国や英国ではないかということのようです。

こうした分析や考察は、今世界が注目する米国の歴史学者でシカゴ大学教授ジョン・ミアシャイマーもほぼ同様です。ミアシャイマーは「いま起きている戦争の責任は、プーチンやロシアではなく、アメリカと NATO にこそある」と断じたとトッドは言います。

何故エマニュエル・トッドやミアシャイマーはそう断じるのか？ トッドは本の中でいろいろとその背景や根拠を書いています。僕は未だそれらを簡潔にスマートに紹介できるほどにこの本を深く読み込んでいないので、ここでは詳しく紹介はできません。ただ、本を読んでみて、彼が特に以下の事態に注目していることを感じました。

1990 年東西ドイツが統一したとき、当時の米国国務長官ベーカーはソ連の書記長ゴルバチョフに対して、「今後 NATO を東方へは 1 インチたりとも拡大しないことを保証する」と言ったそうです。にもかかわらず、1999 年にはポーランド、ハンガリー、チェコが、そして 2004 年にはルーマニア、ブルガリア、スロバキア、スロベニア、エストニア、ラトビア、リトアニアが NATO に加盟しました。更に 2008 年の NATO 首脳会議では「ジョージアとウクライナを将来的に NATO に組み込む」との宣言がなされ、その直後にロシアのプーチン大統領は「強力な国際機構(NATO)が国境を接することは我が国の安全保障への直接的な脅威とみなされる」と強く警告しました。

トッドによれば、ミアシャイマーはそれらに加えて、2014 年の「ユーロマイダン革命」以降にウクライナが米英の衛星国で、NATO の事実上の加盟国となった事がロシアによるこのたびの侵攻の強い要因になったと指摘しているそうです。

つまりロシアが散々警告したにもかかわらず、ウクライナは米英の支援を受けて事実上 NATO 加盟国となったかの如くに振る舞い、軍備の増強を止めなかった事が、ロシアの侵攻を誘発した主要な要因だということです。

さて最後にこの本の中でトッドが指摘し或いは強調している事柄のうち、特に僕の印象に残った箇所の原文を紹介します。この本の結論と言っても良いかも知れません。

「そして何よりも戦争が長期化すればするほど、多数のウクライナ人が犠牲となり、難民として国外に逃れ、ウクライナの建物や橋は破壊されていきます。ロシアによる侵攻前から大量の人口流失によってすでに”破綻国家”に近かったウクライナがこの戦争によって更に破壊されていくのです。

要するにアメリカは“支援”することで実はウクライナを“破壊”しているわけです。戦争が終わったとき生き残ったウクライナ人たちはどう感じるでしょうか。少なくとも私もしウクライナ人なら、アメリカに対して激しい憎悪を抱くはずです。というのも『アメリカは血まみれの玩具のようにウクライナを利用した』ということこそ、既に明らかな歴史的事実だからです」

さて、以下は僕の空想というか妄想のようなものです。今から早ければ 5 年後、遅くも 10 年後、米国は社会の分断化と対立が更に進み、経済力のみならず軍事力までもが酷く弱体化して、対外的な影響力や存在感は著しく低下する。その結果、このたびのウクライナ戦争のように米国が背後で糸を引く事態はもう起きないのかも知れない。

徳川家康の外交顧問になった ウィリアム・アダムス(三浦按針)

なぜ、アダムスは家康に評価されたのか

佐川 雄一 (84歳)

第3回

3. アダムスが英国に送った手紙“未知なる我が同胞へ”から家康との最初の謁見場面を引用する

アダムスの大阪城における家康との最初の謁見(計 3 回)の様子が、アダムスが英国に出した手紙(“未知なる我が同胞へ”)に記されているので、前述 1-4) と重複するが引用する。

『未知なる我が同胞へ。

----- 我々がこの地(豊後)にいる間、皇帝(徳川家康)が我々のことを伝え聞き、直ちに5隻の櫓帆船を(豊後に)送り、それで私を宮廷に連れていきました。皇帝のいる宮廷は、豊後から約 80 リーグ(約 400km)ほど離れています。皇帝の前に出ると彼は、我々は一体どこの国の者か、と尋ねます。それから私は彼のあらゆる質問に答えました。皇帝は国と国との間の戦争と平和に関するあらゆることを尋ねましたから、ここで逐一それを書くのはまぎらわしいくらいです。その頃、私は供として同行した船員の 1 人と牢にいれられておりました。

2 日後、皇帝は再び私を呼び、何故こんな遠い国に来たのか、と聞きました。そこで私は、我々はどんな国とも友好関係を求める国民である、だから外国で取引できる商

品を持ち込んであらゆる国と貿易を行うことを求めているのだ、と答えました。

皇帝はまた我が国とスペインあるいはポルトガルとの間の戦争について、またその原因について質問しました。私はあらゆる点について理解してもらえるように語り、彼も私の話を聞いて喜んだようでした。話が終わると私はまた牢に入れられましたが、私の部屋は別の、もっと良い部屋に変わっていました。

----- (それから)41 日目が来ると、皇帝は私を再び引見し、ここに書ききれないほどたくさんの質問をしました。最後に彼は、船のところへ行って仲間に合いたいかと尋ね、私はもちろんです、と答えると、ではそうせよ、と命じました。そこで私は牢から解放され、出発しました。心弾む思いでボートに乗り、船(リーフデ号)に着くと、(クアッセルナック)船長以下みんな病気も癒えています。船に乗った私は彼らの涙で迎えられました』

アダムスの手紙で、家康に初めて謁見してから2日後に再見、それから49日後に3回目の会談を行っていることがわかる。いずれも会談は深夜にまで及んだ。

4. 家康の指示で2隻の洋式帆船を建造、家康から高い評価を受ける

1604年、家康がアダムスを呼びだして一隻の小型船を造るように頼んだ。家康は、アダムスが英国の著名な船大工のもとで修業したと聞き覚えていて、ヨーロッパ式の船を造ってもらいたいと強く所望した。アダムスは、航海術の修業はともかく、造船術の方は自信がないと一旦は辞退した。しかし、家康はなおも諦めず、心配することはない、船が失敗したとしても責任を取らせるような真似はさせないし、彼に対する評価を下げることもないという。そうまで励まされて、さすがのアダムスもやってみることにした。そこでリーフデ号の営繕係ピーター・ヤンツと向井将監忠勝の助けを借りて、三浦半島の伊東松川河口で80トンの西洋式帆船を建造した。「この船は完全に西洋式で、検分のため乗船した皇帝(家康)は、大いに満足しました」とアダムスは記録に残している。

その後、アダムスの造船技術・航海術は向井将監忠勝によって引き継がれていき、明治維新以降、日本の造船術に寄与することになる。西洋式帆船の建造自体が当時の日本では造船史の記録に残る快挙であっただけに、アダムスに対する家康の評価は大いに高まった。

この時から、アダムスは常に家康の側にいるように命じられる。アダムスは一日置きに江戸城に赴き、家康に数学・幾何等、西洋の学問を教授した。数学はアラビア数字を使って教えるなど、家康も西洋の科学にどっぷり浸る日々が続いた。家康とアダムスの対話中、側近がひっきりなしに入ってきては緊急事項について家康にアドバイスを求めていた。側近はアダムスに部屋を出るよう指示するが家康は退去する必要はないと答え、お陰でアダムスは、家康がどんな仕事に直面しているのか大勢が理

解できた。

① 豊臣家の問題、② 神社とお寺、③ 財政と商業、④ 外交・貿易・キリスト教
これらが家康の直面する政治経済社会課題であったが、このうち、アダムスが担当したのは、④ 外交・貿易・キリスト教に関する問題であった。

家康の寵遇を受けることになったアダムスは、家康の家庭教師のような存在となり、アダムスを師として尊重するあまり、家康はすべてのことをアダムスから言われた通りに受け取るようになったという。こうして家康とアダムスの間に揺るぎない信頼関係が築かれていった。

アダムスは家康から翌年(1605年)、もう 1 隻造るように要請され、今回は少し大きい 120 トンの洋式帆船を同じく伊東松川河口で建造することにした。この西洋式帆船が後日、徳川幕府対外関係の金字塔となった。1609年9月30日、フィリッピン臨時総督:ドン・ロドリゴ・デ・ビベロがフィリッピンでの任務を終えてサンフランシスコ号に乗船、ヌエバ・エスパーニャ(現在のメキシコ)に向けて航行していたが上総大多喜の岸和田沖で難破、50 人が溺死、340-350 人が近隣の日本人に救助される事件が起こった。

この時救助されたフィリッピン臨時総督、ビベロが、翌 1610 年 8 月 1 日、浦賀からアカプルコに向けて帰国したが、彼が乗船したのが家康の求めに応じてアダムスが建造した120トンの洋式帆船であった。この経緯をアダムスは未知の友人宛の手紙で「秀忠はこの船をマニラの総督に貸し、総督は 80 人を連れて同船でアカプルコに渡航した」と書き留めている。

日本で建造した外洋船がスペインの高官を乗せて 17 世紀初頭、太平洋を横断してアカプルコまで航行した快挙を前にして、家康と秀忠は大層至福に浸ったのではないだろうか。

5. 平戸にオランダ・英国東インド会社の商務館が開設され、アダムスは江戸幕府との仲介役として両商務館に勤務する

アダムスは家康との最初の謁見時から、オランダ・英国との交易を働きかけ、家康も前向きに対応する姿勢を示していたが、平戸にオランダ商館が設立されたのは 1609 年であった。アダムスの尽力で、家康が平戸に恒常的な商館の設立を認め、ヤックス・スペックスがこの年、初代の商館長に任命され、1621 年まで商館長の任にあった。平戸商館は開設当初、苦勞したが、スペックの努力が実り、彼が商館長を勤める間にアジアで最も利益を上げる商館に成長した。

その後、江戸幕府が鎖国に踏み切り、ポルトガル商人が国外退去を命じられると、それまでポルトガル商人が使っていた長崎の出島が空き家になり、幕府はオランダ商

人に出島への移転を命じた。これを受けて、オランダは 1641 年、平戸から長崎出島に商館を移すが、その後、オランダは 1859 年まで出島に留まり、鎖国後、日本との唯一の交易国として出島の商館を維持した。

それから英国商館であるが、1613 年、リチャード・コックスを平戸の商館長に任命して商館を開設した。商館設立後、長崎、江戸、大阪、等に代理店を置くなど取引拡大に取り組んだが、家康の死去で跡を継いだ徳川秀忠は海外貿易を幕府に一元化する目的で交易拠点を長崎・平戸の二港のみに制限すると、英国商館は日本国内での取引拡大が難しいと判断して、1623 年、平戸商館の閉鎖に踏み切った。

英国商館の日本における歴史は 10 年と短かったが、この背景には、オランダとの間に厳しい交易面での競合があったことも指摘される。それまで友好国同志であったオランダ・英国は、アジアでの交易量が増えるとお互いに競争意識を高め、間に入ったアダムスの立場は微妙になった。アダムスは、オランダ・英国商務館と役務契約を結び、双方の取引拡大に全力を尽くすが、英国商務館から見ると、英国人のアダムスが、なぜ オランダのために働くのか、さらに長い間、英国と陰悪な関係にあるポルトガル・スペインの商人に是々非々ベースでなぜ 協力するのか、英国商務官はアダムスの行動に厳しい視線を向けることになる。アダムスが様々な国の人と親しく付き合うのはイギリス商館員にとって目障りだったのである。

これに対し、アダムスは、リーフデ号の漂着後、独力で築いてきた名誉・地位に配慮して、協力を懇請されれば誰とでも取引するのが、アダムスの置かれた立場であるとして己の信念を貫いた。

ポルトガルであるが、1543 年、ポルトガル人が初めて日本(種子島)に漂着し鉄砲を伝えたが、その 7 年後(1550 年)、ポルトガルの商船が平戸に入港、キリスト教の布教と交易を始めた。しかし現地の藩主・商人がもろ手を挙げてポルトガル人を歓迎したのは長崎であったため、1571 年から長崎がポルトガル商船の寄港地となった。そのお陰で、長崎は貿易港そして海外の先進技術・文化の窓口として成長していくことになる。

当初、藩主たちはヨーロッパの新しい宗教の布教に好意的であったが、急激に増え続けるキリスト教徒に幕府は、不安を感じキリスト教の布教禁止令を出すに至った。最初に国外退去を命じられたのは、1624 年、スペイン人であった。その後も統制が難しくなり島原でキリスト教徒の反乱(島原の乱、1637-8 年)が起こる。戦いは双方に甚大な犠牲を出す、幕府軍が反乱軍を撃滅し、この乱を機会にキリシタン弾圧を強化し、1639 年ポルトガルとの通商を断ち、幕府は鎖国体制に入った。

(つづく)

「台湾の歴史を学ぶ」(4)

田口秀美 (72歳)

(『八王子市南大沢 歴史の会』所属)

③ 清朝時代 (2)

近代国家の形になった日本国も台湾に進出してきました。1868年まで(明治時代以前)の日本は、約300の封建領主が統治、分立する、連合国家のような国家形態でした。この、約300の封建領主の国の歴史は、遠く1600年と1615年に、さかのぼります。

1600年の「関ヶ原の戦い」、そして1615年の「大阪夏の陣」で、日本の封建領主が、二つの勢力に分かれて戦いました。約20万人が戦いに参加して約8千人が戦死したと記録されています。この戦いで勝った勢力が、江戸(現在の東京)に権力の中枢を置きました。徳川氏を中心とする徳川幕府です。

徳川権力は、京都に住む天皇を国家元首としての地位を守り尊重し、姻戚関係も結んで、約300年の間、儀礼をつくして尊重する政策は続きました。徳川権力が成立する前の歴史においては、天皇が封建領主に指令(令旨)を発信、その指令を根拠に封建領主が決起し戦乱が起こっていたため、徳川権力は天皇の住む京都に監視役(京都所司代)を置いて他の封建領主との交流を監視しました。この政策によって天皇が権力闘争に巻き込まれることなく約300年、平穏に過ぎました。また、300近くの封建領主の家族らが江戸で暮らす義務とした制度も戦乱が起こらなかった要因と言われます。

1600年の「関ヶ原の戦い」のころ一艘のオランダ船が豊後(現在の九州・大分県)の浜に漂着しました。「リーフデ号」です。2年前に東洋との貿易を求めオランダを出帆した5艘の中の1艘です。5艘のうち1艘は引き返し、1艘はチリ沖でスペイン船に拿捕され、1艘はモルッカ諸島にたどり着いたが乗組員のほとんどがポルトガルによって殺害され、残る2艘、旗艦「ホープ(希望)号」と「リーフデ(愛)号」が、チリ中部沿岸のサンタ・マリア島から太平洋に乗り出しました。行き先は、雪も降り氷も張り毛織物が珍重される国という情報がある日本へ向かうことにしました。

勇躍、太平洋を横断して日本へ向かいましたが、「ホープ号」は沈没したらしく行方不明になり「リーフデ号」のみ日本の豊後の国の浜にたどり着きました。出帆したとき110名いた乗組員のうち25名が生き残り難破船の状態に漂着しました。乗り組んでいたイギリス人航海士ウイリアム・アダムス(後の三浦按針)は書簡に「立っているのは私の他は6名だった。」と記しています。

「リーフデ号」は、大砲 18 門、小銃 500 挺、砲弾 5000 個など、武器弾薬が積み込まれていました。ポルトガル人から「彼らは海賊だから処刑するように。」と進言がありましたが「リーフデ号」と乗組員は江戸まで曳航されました。ウィリアム・アダムスは、将軍の徳川家康と親しく話す関係になり、海外の状況や天文学、幾何学などを伝え、2 艘の西洋船も建造しました。日本橋に屋敷と三浦に領地を与えられ、三浦按針という日本の名前になって、徳川幕府の軍事、外交顧問の役割をしました。カソリックの国スペインが、アステカ王国やインカ帝国を滅ぼし植民地にして膨大な金を手に入れたこと、フィリピンを植民地にしたことなどを伝えたことも、その後の徳川幕府の政策に影響を与えたと言われます。

九州・長崎地方の島原・天草地域は、封建領主の有馬晴信、小西行長などが宣教師の布教によりカソリックの信徒となりました。その領地の村々もカソリック信徒の村となって仏教の寺院を打ち壊し、カソリック信徒にならなければ「村八分」になるため、こぞってカソリック信徒になったとの証言が残ります。江戸幕府はキリスト教の布教と信仰を禁じました。カソリック信徒の封建領主は改易（領地の没収）になり、新しい領主になった寺沢広高、松倉重政は信仰を変える事を強制するため残酷な拷問を行い、更に税の取り立て（米の物納）を過酷に行なったため一揆（暴動）になりました。カソリック信徒に浪人（仕える主君を失った武士）も加わって原城を占拠し、立てこもりました（1637 年 10 月）。神の教示を受けたという少年・天草四郎を支えに 38000 人が籠城、取り囲んだ 12 万人の軍と 4 か月にわたって戦いました。「戦って死ねば殉教者としてパライソ（天国）に行ける、天草四郎様が奇跡を起こす、スペインから強い軍隊が応援に来る」と信じて戦いましたが 1638 年 2 月に全滅しました。オランダ船「リーフデ号」の砲手も原城砲撃に参加したと記録されています。

「島原の乱」は、徳川幕府にとって衝撃的な事件でした。以後、カソリック信徒の国のスペイン、ポルトガルの入国を禁じオランダだけが、ポルトガルが退去した後の長崎の「出島」の商館を通じて貿易ができることになりました。「出島」のオランダの商館をめぐっては、当初、オランダ東インド会社がさっそく堅牢な倉庫と商館を建造しました。江戸幕府の目付が、城塞を建造したと確認して江戸幕府に報告しました。江戸幕府の奉行が訪れ商館長に「城のような建物を破壊し簡素な商館に建て替えるように。」と要求しました。この要求に応じない場合は切り倒す予定で、腕の立つ武士 20 名が控えていたと言われます。オランダ商館長は要求に応じ、簡素な商館に建て替え、この時から 300 年近く、オランダの東洋との貿易の拠点になりました。

江戸時代の約 300 年の間、オランダの商館長が江戸城を定期的に訪問し、定期

的に「オランダ風説書」で世界の状況を報告していました。時代が過ぎて 1853 年にアメリカのペリー提督艦隊が日本に向かっていることも、事前にオランダの長崎商館長から江戸幕府に伝えられていた 1852 年の「オランダ風説書」で知っていました。

1853 年 7 月、アメリカのペリー提督艦隊が、浦賀に現れたことは、日本中に大きな衝撃が走りました。4 艘の大型船「黒船」のうち 2 艘は、当時の最先端の大型蒸気船でした。幕府の担当役人とオランダ語の通詞を乗せた小舟が近づき、オランダ語通詞の堀達之助が「I can speak Dutch!」（私はオランダ語が話せます!）と叫んで、やがて乗船し交渉が始まりました。アメリカ側も収集した日本に関する情報から、オランダ語の通訳が乗船していました。

ペリー提督はアメリカ大統領の国書を徳川幕府に渡し、1 年後に再来訪し和親条約を締結することとして 9 日間滞在して帰っていきました。ペリー提督艦隊は、1 ヶ月分の食料しか積んでいなかったという事情もあったとのこと。

(つづく)

国立慕情(15)

津田孚人(85歳)

昨年、一昨年と中止の旧三商大バスケットボール定期戦が、神戸大主催で6月22日から3日間開催された。この定期戦にはいろいろな思い出、思い出がある。

本大会は昭和9年(1934年)にスタート今年で通算85回目になる。途中、昭和16年、日米開戦の年は、文部省通達で中止。昭和17年に第9回が東京で行われたのを最後に昭和18年から戦後の昭和21年まで中止、そして戦後、昭和22年(1947年)に復活第一回が神戸・西宮体育館で行われている。

スタートの経緯はよく分からないが、他の競技、特に伝統競技の柔剣道、弓道などは、すでに対抗戦の形で対戦をしており、この昭和9年、10年ごろには、バスケット、バレー、サッカーなど、西洋発祥のスポーツクラブが、軒並み三商大戦をスタートさせている。ブームみたいなものがあったのかもしれない。

バスケットボールは、東京商大が昭和9年に関西に遠征、昭和10年に再度遠征したときに三商大箏球連盟を結成し、昭和9年を第1回、昭和10年を第2回として三商大定期戦がスタートした。

各校の歴史の歩みは同じではない。東京は、高等商業学校が明治20年創立、商科大学へは、大正9年4月昇格。神戸は、国立神戸高等商業学校の創立が明治36年(国内2番目)、商科大学へは昭和4年に昇格。大阪は、市立高等商業学校から昭和3年4月に商科大学へと昇格、さらに箏球部は、東京が大正12年(13年説もあり)、大阪、神戸は、大学昇格時に籃球部が出来ている。バスケットの漢字表示が、当時

名古屋以西は「籃球」が使われ、関東では、当初は、「籠球」「籃球」両方使われていたが、のちに「籠球」に統一された。東では、「籠」は底が抜けているが「籃」は抜けていない、よって「籠」にすべしと合理的に考え、関西は「籃」を戦後まで続けていたようだが、東西の意地の張り合いがあったようで面白い。

昭和10年、三商大連盟は、第1回全国高等商業学校籠球大会を開催(7月13日～16日)するが、三商大戦(7月16日～18日)を同時に行っている。日程的には、かなり厳しく無理があったように見えるが、高商大会を是非実現したいという強い決意があったように見え。何故開催を急いだか、記録が残っていないが、伏線はあったように感じられる。

昭和2年から全国高等学校籠球大会が、東京帝大主催で行われ、また昭和3年から同様の大会が京都帝大でも行われた。しかし昭和4年からは両帝大は、大会を共催とし昭和8年の第5回大会では、高校・中学・師範・実業の4ブロックに分けて試合が行われ、武蔵高校、東京市立一中、山形師範、新潟商業がそれぞれブロック優勝、大会機運が大きく盛り上がったと推測される。

そのような状況を見て、三大学は三商大連盟を結成し第1回全国高等商業学校籠球大会を開催したと考えても可笑しくない。両帝大に対抗して開催したのか、あるいは、補完するために開催したのか、動機は不明であるが、申酉事件、籠城事件などを省みると東京商大には、帝大に対する対抗意識があったと考えても無理はなく、東京主導で三商大連盟を結成し、全国高等商業学校籠球大会を開催した、と考えるのだが…。東京商大の先輩方は、何も記録を残していない。

『第1回全国高等商業学校籠球大会』についてと題して、雑誌「籠球」にのった三商大連盟が発した文章というのが、大阪市立大学バスケットボール部50周年記念誌に掲載されている。

「第1回にも拘わらず、東部8、西部11という殆ど全国高商中余すところなく参加をみ、盛大に挙げる事を得たのは主催者として慶賀に堪えぬ処である。本大会は、全国を2に分ち、各々トーナメント方式により予選せられたる両チーム間に決勝戦を行い以て全国優勝チームを決定するもので今回東部は東京商大室内コートに於て、西部は甲子園室内コート於て13、14の両日一斉に開催し、東部は東京商大予科、西部は神戸高商が予選せられて、16日午後1時より両者の決勝が東京商大コートに於て挙行せられ神戸高商遂に栄ある第1回の優勝者となり文部大臣盃を獲得す。今回は兎角不手際に失した処もあったが、今後、回を重ねるに従い大日本バスケットボール協会並びに参加諸校其の他一般各位のご協力同情によって益々盛大にいたしたいものとする次第です。」

西部地区は、甲子園コートで13日、14日と予選をし、優勝チームの神戸高商は、

上京して16日、東部地区優勝の商大予科、と東京商大コートで決勝戦を行っている。三商大戦(第2回)も16日から始まっているので、東京、大阪、神戸、三大学が一体となって、運営に協力したものと思われる。

三商科大学の関係の良さについてさらに考えてみると、日本のバスケットボールが、東京、横浜、大阪、神戸、などの YMCA を通じて普及、拡大していったところに起因しそうだ。東京商大バスケットボール部の昭和6年卒の故植田義巳先輩が、東京 YMCA の選手をしていた複数の先輩の話をしていたのを思い出す。籠球の日本への伝来、普及について簡単だが、調べてみた。

明治41年大森兵蔵がスプリングフィールドの体育学校を卒業して帰朝したときにバスケットボールを国内に紹介したのが最初とされるが、明治40年に山本邦之助が北米基督教青年会の見学に行き、YMCA に接して少年への事業と、体育館の運動奨励方法を見て帰国、明治41年、神田御茶ノ水・美土代町会館にオープンコートだがバスケット、バレー、ハンドボールのコートを作った。業務は大森兵蔵に委託し、米国よりの名誉主事デービスなどの協力を得て新しい運動を促し、大森は、YMCA 会員だけでなく、目白の日本女子大学に関係して女子へのバスケット指導も計った。しかし、大森は、1912年(明治45年)にストックホルムで開かれた国際オリンピック大会の帰路、米国で客死、YMCA の事業は頓挫した。

大正3年、フランクリン・ニッチ・ブラウンが神戸 YMCA に初めてバスケットボールを移入、大正5年の春頃から東西の YMCA ジムナジウムで競技としての芽が出始め、神戸、東京、横浜の YMCA で広まった。

大正6年、第3回極東大会が開かれ、京都 YMCA チームが日本代表として参加したが、在留米人チームなどにもまれた東京、横浜の YMCA のチームは京都よりはるかに強く、大正10年5月、上海での極東大会には、東京 YMCA チームが参加した。協会は、バスケットボール競技にたいする認識を強くし、その普及発達を目指す方向に歩みだし、11月には、駒場での第9回陸上選手権競技大会に際して、第1回全日本バスケットボール選手権大会を挙行し、本格的にバスケットボール競技の管理を開始した。

以上のように、日本のバスケットボール競技は、各地の YMCA を拠点にし、大正6年11月に東京 YMCA 体育館が竣工すると、ブラウン指導の東京 YMCA が力をつけ大正12年まで、東京 YMCA の時代がつづいた。

12年9月、東京大震災が発生、東京 YMCA の体育館が焼失、有志により12月1日、2日、の両日、戸山学校でバスケットボール復興大会が開催され、参加するは20チーム、優勝は立大、2位は東京商大だった。

大正13年、関西地方では、関西バスケット連盟主催の第一回関西バスケットボール選手権競技が開催され、17チームが出場、大阪 YMCA が優勝した。ただし、神戸外国人チームとの番外試合では、完敗している。

三商大定期戦は、昭和10年につづき11年以降も、全国高等商業学校大会と合わせて順調に行われた。戦績は以下のとおり

11年(1936年) 於 甲子園室内コート

三商大 大阪、東京3勝1敗で同率、決勝戦を行って 大阪商科大優勝

高商大会 神戸高商(西部)、横浜高商《東部》で決勝戦、神戸優勝

12年(1937年) 於 東京国民体育館

三商大 東京商大 4勝0敗で 優勝

高商大会 東商大予科と福岡高商で決勝戦 東商大予科 優勝

13年(1938年) 於 甲子園室内コート

三商大 東京商大 4勝0敗で優勝

高商大会 高松高商 優勝

14年(1939年) 於 東京国民体育館

三商大 東京、大阪で決勝戦 大阪商大 優勝

高商大会 神戸高商 優勝

15年(1940年) 於 甲子園室内コート

三商大 東京商大 4勝0敗で優勝

高商大会 関西学院高等商業と名古屋高商で決勝戦、関学優勝

16年(1941年) 中止

17年(1942年) 於 東京商大

三商大 東京 3勝1敗で優勝

高商大会 関東学院が福岡高商を破って優勝

18年(1943年)～21年(1946年)まで中止

昭和16年、三商大直前に突然の中止命令があり、驚き、戸惑う様子を東京商科大学 籠球部々報(臨時?)は、このように伝えている。

「我々が三商大リーグは勿論、学生の夏季団体移動は全部中止されるであろうと云う話を学校当局より聞きましたのが、神戸商大は既に着京し、大阪商大の籠球部一行を東京駅に出迎えに参りました7月12日の夕刻でありました。此の文部省の通達は、その理由を訊ねるまでもない事でありまして、現下の日本の直面してゐる超非常的情勢を眺めればお分かりになりますことで、我々としては真向より肯定せざるを得なくなりました。

それで万事休したわけでごさいます、其後は目の廻る様な忙しさで、一方には三商大の懇親ゲームの交渉をし、他方では高商大会中止の電報を各高商に、又先輩各位に電話をおかけしたり速達をお出ししました次第です。三商大リーグは公式には開催することが出来なくなりまして、予科コートで当部と両商大と非公式に懇親ゲームを行ひ後に詳しく記しましたが、我々は両校に大勝しました。選手一同は何となくがっかりしてしまひ皆早く帰省したい様子で、先輩の方々とも一回会合してゆっくりお話ししたかったのですが、その閑暇もなく7月16日春のシーズンの解散会を行ひ別れた次第であります。(以下略)」

部報は、臨時のようである。書きなぐりの文章、乱れた文字、突然の命令にどう対処してよいか、気が動転していた様子が見える。その後に緩和命令が出て、昭和16年の関東大学リーグが開催されたことが12月に発行された部報に記されている。

昭和32年入学したときの旧三商大戦は、神戸で行われた。東京駅から夜行寝台「銀河」の三段ベッドの一番上に寝て下阪、宿舎は御影駅前の小旅館、試合は、県立神戸高校の体育館だった。学生は、みな貧乏、遠征費の大半は先輩の寄付だった。高度成長期を迎えると先輩の寄付をあてにしながらも、学生も豊かになり、新幹線にのり、ビジネスホテルに宿泊している。

今年、大阪市立大学が大阪府立大学と合併して大阪公立大学となり全国で3番目のマンモス大学になった。戦後、新制大学になってから、神戸、大阪の両校は、総合大学へと大きく変身し、そのため、三商大戦も「旧三商大戦」とうたわざるを得なかった。現在、すでに、3大学共通でOBを含め、7～8割方は、「旧三商大」の古い歴史は知らないと推測する。

時代の変化が激しい時代、「三大学定期戦」と名称が変わる時が、早々に来ると予想しているのだが・・・。

事 務 局

天地シニアネットワーク事務局（津田 孚人）

〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電 話・FAX 03-3819-7651